

かがやき

第7号

文責 川崎 里佳

「1.17」を語り継ぐ…

いのちの学習

1995年1月17日午前5時46分、淡路島北部を震源にマグニチュード7.3の直下型地震が発生。神戸市などで震度7を記録した。気象庁は「兵庫県南部地震」と命名。建物の下敷きになるなど、6434人が死亡。行方不明3人、負傷者4万人以上。神戸新聞 HP より

先週、1月17日（水）は阪神淡路大震災からちょうど23年。1校時には各クラス、震災や災害について考える授業を行いました。4校時には防災訓練。あいにくの雨で体育館に避難したあと全校で黙祷をしました。消防署の方から防災についての話を聞き、その後震災時に宝塚市内の中学校に勤務されていた校長先生から当時の様子や体験談を聴きました。

2年生は1週間前の1月11日（木）に23年前の地震による被害の様子や人々の暮らし等を写真や映像で見て、被害の大きさを改めて確認しました。私たち大人が震災といえば「神戸が燃えていた」風景を思い出す反面、震災後に生まれた生徒達にとっては遠い過去のことである実感のないものだったかもしれません。しかし、当時の映像を見て知ることにより、家庭で学習したことを話した生徒達もいます。そして、家庭で聞いた話を教えてくれた生徒もいます。

生徒のノートの一部を紹介します。

◎体験談 (生徒ノートより)

私の父は、少しずつ話し始めました。

父は震災の時、神戸の長田区で働いていました。朝、強い揺れで目を覚まし、外を見ると建物が崩れかけていたそうです。署に出勤すると、そこには、トイレのお掃除の方がいました。震災でトイレに水が流れていない時にも、一生懸命掃除をしていました。その方に、私の父が話しかけてみました。すると、その方は驚くべき事を話し始めました。

「私の家は震災ですべて壊れてしまいました。息子も行方がわかっていません。とても不安です。」

父は尋ねました。

「なぜ、そんな大変な時に、トイレの掃除をしておられるのですか。」

すると、その方はこう答えました。

「いつもお世話になっていますし、あなたも被災者のために働いているではありませんか。」

私だけ何もしないわけにはいきません。何かしないと落ち着きませんしね。」

と、少し笑って見せていました。

その時、私の父はその方の強さを感じたそうです。

それからどれだけ辛いことがあっても、あの時言われた言葉を思い出し、がんばれたそうです。

あの時の言葉、表情、意思の強さ、全てが父の心に残り続けています。

その話をした後、父はそっと、

「あの人は僕の憧れだ。僕もあの人のような強い人になりたい。」

とつぶやきました。

震災には失うものもたくさんあります。ですが、このようなことから学ぶべきことが山ほどあることに気づかされました。

大変な時こそ、人の心が表れること。

自分のことだけではないこと。

自分のため、みんなのためにすること。

私には、考えることが山積みということを実感した日でした。

強い揺れで目を覚ました朝。しばらくしてテレビを見ると、荒れ果てた神戸。電車も運行していません。

母はその時働いていたお店が気になり、お店に向かって走り出したそうです。でも、お店が遠く、途中でやむを得ず断念しました。よくしてくれていた店長さんや先輩のことが心配で心配でたまらなかったそうです。しばらくして、電話がつながり、安全が確認されました。あの時の安心感は今までで一番強かったそうです。

大切な人がいなくなったら…。

大切な場所がなくなったら…。

そんな不安はとてつもなく大きいものだということを知ったそうです。

その日から母は、昔以上に心配症になったそうです。

父が仕事から帰ってくるのか…。

私達が学校から帰ってくるのか…。



キリトリせん

感想カード

年組番名前

「かがやき」の感想や「木曜日こんなことしました」「家でこんな話し合いしましたなど、感想カードに書いて、担任の先生に提出してください。

